

岡部先生の個人主義

星 野 命

本学の開学後まもなくから、十一年間にわたって、大学院教育学研究料の設置，ならびに発展につくされ，教養学部 of 学生問題・入試プログラムなどについても貢献された岡部先生は，今春本学の定年規定にそって退職され，今後は上智大学大学院の創設や青少年進路相談所長の仕事を続けられることになった。

本学における先生と私とのご縁は，私が着任した 1957 年以降のことですほど長いとはいえない。しかし，私の着任にさいしては，そもそも岡部先生とのそれまでのご縁が少なからず反映しており，それは私が東大文学部の学生として教室で初めて先生にお目にかかったとき，すなわち 1950 年以來のことであるから，それを加えると，かなり長いご縁である。

先生が私を個人として認められたのは私の提出した自叙伝を go らんになったのことと思う。たしか自分の家族のことなどをも記したのが，たまたま先生のご記憶を刺激したのか，のちになって，私の結婚披露のさいいただいたお祝いのスピーチにも自身の記したことなどにふれられて恐縮したことがある。また，私が米国に留学する直前に ICU に先生をおたずねしたとき，広いキャンパスを牧場の方まで歩いてご案内下さったことも忘れられない。そのせいかどうか私には，岡部先生のことを日本の教育心理学界の先達・泰斗とか，ICU の重鎮などと形容するのでは（事実には相違ないが），何かしら遠い存在のような気がしてピッタリこない。

私にとって師であり上司であり，また折りにふれて不満をのべる相手であった先生は，しかし決して私たち若いものを見下したり，親分ぶったり，支配されることが少しもなかった。陰では先生のことを大沢天皇と評したり，またその評言に適切な先生のご容姿（那須高原でのご散策など）も見

られたが、ワンマン的なところは微塵もなく、他大学などでは旺々多くの弊害さえ生んでいる家の子郎党的研究室経営は、先生の好まれるところではなかったと思う。反面、ごく最近になるまで、ご自分の責任にかかることは、いろいろと煩雑なことでも、人任せにはなさらず実行された。

何でもないことのように、私が特に感じ入ったのは、本館 101 号室でのご研究のあい間に、ご自身で遠くの水道まで、お湯わかしに水を汲みに行かれてお茶を淹れておられたことや、また食堂で食事がすんだ後で、「ついですから先生のお皿も一しょに運びましょう」と申し上げても、「いやあ、結構です」と仰有って必らずセルフ・サービスの原則を守られたことがある。これは私たちですらうっかりすると若い人たちや学生にたのんで運ばせかねない点でほんとうに教えられた。こんなこともあった。それは、教師仲間で座興になさった手品を、学生との親睦会でもしていただくようお願いしたところきっぱりと拒絶なさったことである。そのとき、先生の語調には理由などをうかがう気になれないほどの厳しさがああり、今のことばでいえば、T・P・O・を心得られた先生の節度のしからしめるところと推測した次第であった。さらに、学生からいろいろ相談を受けたときなど、私たちであれば、しばしば相手の云い分を聴くのにせいいっぱいだったり、相手の立場への遠慮があったりして、相手が知りたがっているこちらの判断や意見をなかなか出せなかったり、あるいは出さなかったりするところであるが、岡部先生は常に、また時としては特にはっきりと（のちにそれが適切であったことを知らされるのだが）、ご自身の判断や意見を示され、かつ具体的な助力をも惜しまれなかった。それはご自身の経験と判断とに自信を持つ人のみの示す誠意あるカウンセリングの一つの姿で、一方で地位や年の功にいっさいこだわっておられない先生の個人主義のもう一つの側面であった。

万人の認めていることであるが、岡部先生は姓氏の素姓に詳しく、どの姓はどの県に多いとか、どの姓にはどういう人がいるとかをよく語られ、また学生の氏名をよくおぼえておられる点では、私たちがその足もとにも

及ばない感を抱かされる。恐らくそれは姓によって先生の頭の中の分布図にマップされ、かつ学生生活中的、また自叙伝の中でのエピソードなどによって定着していると思われる、が最近では新入生の数も多くなり先生と接触する学生の数も限られてきたので、本領を発揮される先生にお目にかかることも減ってきた。

先生はご旅行、とくに温泉を訪ねるのがお好きなようで、御家族連れで、ときにはお一人でも東北の草深い温泉や、本土の南端指宿に泊られたときのお話は楽しく、また毎夏行われる ICU 心理学クラブのセミナーには那須を推奨され、入浴だけでなく自由時間には弁天の温泉プールに赴かれて、手拭鉢巻で泳がれたのには、学生ともども嬉しくなってしまった。

こういうエピソードはきりがなし、またそれを逐一記すことは先生のあまり好まれないところではないかと思うので止めるが、結論すれば、先生はご自分でお好きなことをご自分のペースでなさり、それについては、他人の思惑や干渉を気になさらず、かつ他の人に対しても、その人自身のやり方を尊重なさるというやり方を通されたということになるろうか。おかしい義理とか形式的な組織とかにこだわらない先生の態度——私などはさしずめそれに甘えて過し、不義理もし、身勝手なことも多かったと反省しているが——私がそこから学んだことも多い。大学におけるひとりひとりの言行が、仕事、組織、地位、義務などに基く「べし」「べからず」で縛られ、いつも「みんなで一しょに」「ほかではこうだから」などといってさっぱり発展しないコレクティヴィズムが色濃くなってゆくところなどでは、きっと先生のものにこだわらない個人主義は、古いようでいてフレッシュな考えや行動力を生む母胎のような感じがする。その意味では岡部先生の学風と人格に反映されている個人主義に、私は郷愁に近いもの、いやそれ以上に脱帽したい尊さを感じて、それを身に帯してゆきたいとさえ願うのだが、これは私だけの願いだろうか。

岡部先生が今後もますますご壮健にその歩みをご自身のペースで続けられるように心からお祈りして、この記念号に寄せる一文を終る。(本学助教授)